

## 序

長年にわたり、研究に、教育にと貢献されてきた法学部の鶴崎明彦先生が、2023年3月31日をもって退職される。

鶴崎先生は、慶應義塾大学文学部フランス文学科をご卒業の後、大学院文学研究科フランス文学専攻博士課程を修了された。文学部非常勤講師などを経て、1993年にフランス語担当の専任教員として法学部に着任され、以後30年間、義塾のために、学部のためにご尽力くださった。

研究者としての鶴崎先生は、19世紀フランスの詩人ジェラルド・ド・ネルヴァルの作品研究から出発された。その後、研究対象を19世紀から20世紀初頭にいたるフランス文化史に広げられた。代表作は「新しい芸術の誕生——自由帝政と芸術」（『教養論叢』125, 2006年）、および「近代世界システムの中の日本美術——ジャポニズムと明治日本の美術政策」（『教養論叢』130, 2009年）で、前者は140ページ、後者は300ページを超える大作である。綿密な調査、該博な知識に基づく重厚な内容で、日本とフランス、文化史と政治史、経済史をつなぐスケールの大きい研究でもあり、歴史研究の面白さが存分に伝わる力作だ。さらに、統編的な位置づけの論文として、「「抽離」の美術——フェノロサの美術館批判をめぐる」（『教養論叢』139, 2018年）も発表されている。さらに続きが読みたくなる。

教育者としての鶴崎先生は、学生を愛し、学生を育てることに情熱を注がれた。周到に授業の準備をされ、丹念に作られたプリント教材は、そのまま参考書として刊行できそうなものばかりであるという。鶴崎先生は2009年10月から2011年9月まで、学習指導主任として、日吉における法学部教育のまとめ役を担われたが、学生対応に熱心な鶴崎先生にはまさに適任であった。留学生の在留資格の問題で、何度も入国管理局に赴かれたというが、このような点にも、鶴崎先生が学生を全力で守ろうとする温かい心情がうかがえる。

鶴崎先生は我々同僚に対しても丁寧にご対応くださった。鶴崎先生が学習指導主任であったとき、私はスペイン語の語種代表で、鶴崎先生が司会進行をなさる会議に何度か出席した。私を含め、会議の出席者には鶴崎先生よりも若手の教員が多かったと思うが、鶴崎先生は偉ぶることなく、それぞれの教員の立場を尊重して、細やかに議事を進行されていた。時々いただくメールの文面も、とても丁寧な言葉遣いで、かつ的確でわかりやすいため、気持ちよく仕事ができた。

2006年に法学部副専攻認定制度がスタートした当初、2年生向けに何人かの日吉法学部教員で、各人が担当する人文科学研究会の説明会を合同で行っていたが、その中でもやはり鶴崎先生が最年長的なお立場であった。最初に鶴崎先生がご自分の人文科学研究会について説明され、学生への説明とはこのようにするものだと、良い手本を見せてくださった。あの頃の若手・中堅教員にとっては、頼れる先輩であった。

普段の鶴崎先生は、フランス旅行のエピソードなど、楽しくお話をしてくださる。その一方で、実直で責任感が強く、学部の中での信頼も厚い。2015年10月から4年間、学部長補佐の重責を負われたのは、その表れである。芯の硬い、引き締まったご意見を述べられる鶴崎先生を前に、学部長、日吉主任もタジタジであったかもしれない。

「硬い」と言えば、鶴崎先生は煎餅が好物であった。私は法学部への着任間もないころ、学部の先生方のために菓子を用意する機会があったのだが、私が用意した煎餅を鶴崎先生が大いにほめてくださった。私は気を良くして、次の機会にはさらに美味しい煎餅を調達しようと張り切ったものだ。鶴崎先生はほめて人を伸ばす術も心得ておいでであった。

思い出は尽きず、鶴崎先生のご退職は実に寂しい限りである。これまでのご功勞に感謝申し上げるとともに、お元気で、ますますのご健筆、ご活躍を祈っている。

2023年2月